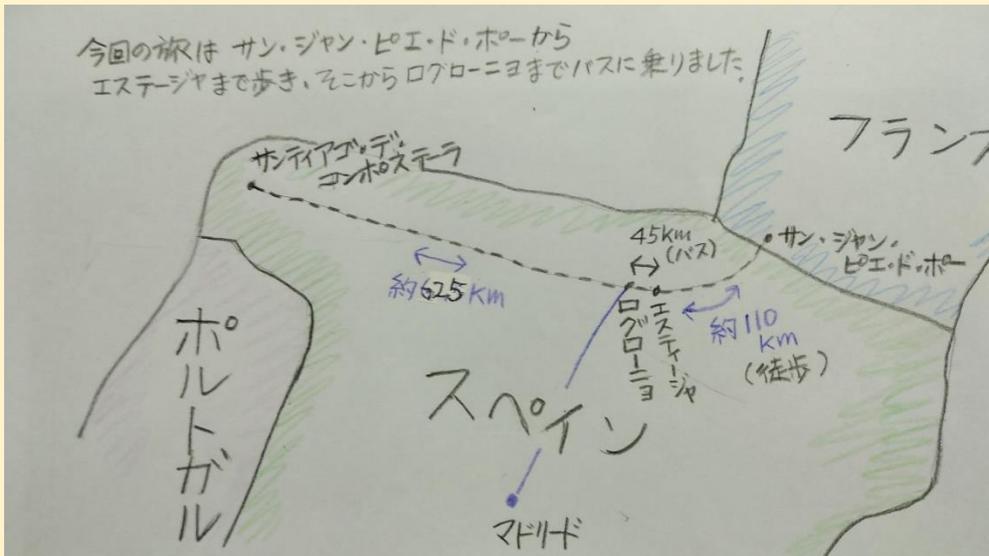


第2回サンティアゴ巡礼 (今回はログローニョまで)【上】

(2018年4月27日～4月29日)



私はこのたび二度目のカミーノを行った。「カミーノ」とはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの巡礼の旅のことであるが、巡礼路のこともカミーノというし、巡礼者のこともカミーノという。(ペリグリーノともいう。) 便利な言葉である。それに「巡礼をした」と日本語で言うといかにも何百キロもの長い行程を聖地まで歩ききったような印象を与えてしまうが、様々な事情でそれが叶わずほんの一部だけ(といってもせめて百キロ以上でないと少なすぎるが) 歩いただけでも「カミーノ」ということはできる。長い日程を用意することができずに何度にも分けて行う人もいるのである。

私は二年前に初めて行った時には頑張って31日間を用意し、曲がりなりにも南仏のサン・ジャン・ピエ・ド・ポーから(以後 SJPP と略記する) スペイン北西部のサンティアゴ・デ・コンポステーラまで移動した。しかし全行程約780kmを歩ききったわけではなかった。そのわけは、荷物が重すぎて予定通りの距離を歩けなかったからだ。しかも途中でケガをして歩くスピードがさらに下がった。それで私はもう腹をくくって途中バスや電車をどんどん利用してとにかく予定の日までにサンティアゴにたどり着き無事に帰国することを第一の目標とした。帰りの列車や飛行機や最後の日のホテルがすでに予約済みであったから。

しかしヨーロッパといえどもフランスもスペインも日本ほど公共交通機関の運行は密ではない。列車やバスを利用するにしても運行本数は少ないし乗り継ぎでもあれば待ち時間は長くかなり時間のロスが出る。駅も必ずしも巡礼路の近くにあるとは限らないので地元の地理に不案内な外国人の身であればなおさら、かなり時間的な余裕を持って駅やバス停に向かわなくてはならない。そのようなわけで結局私が自分の足で歩いた距離は350km

弱で終わってしまった。

私はそれが悔しくてならなかった。一日平均30kmで25～26日間歩き続けようと考えたこと自体がそもそも無謀だったかもしれないが、もし荷物があんなに(15kg)重くなかったら、そして途中で転んで(多分、荷物が重かったせい)足を挫かなければ一日平均25kmくらい歩けたに違いないのだ。私は二年前、こんなに美しい道なのに苦しいばかりでちっとも楽しくない辛い行程を歩きながらずっとずっとそのことを考えていた。次にはきつと荷物を軽くしてリベンジをやるのだと。

なぜ初めから荷物を軽くできなかつたか？それは知らないことが多すぎたからだ。サンティアゴ巡礼はヨーロッパ人にとっては日本人が富士山に登ろうとするくらいにポピュラーなことだが、遠い東の果ての国に住んでいるとやはり得られる情報はとても少ない。ネットには体験記がいくつか見られるが、やはりほんの数名の、しかも時間に恵まれて40日以上も旅ができて休養日まで設定できる人たちだ。私とは条件が違う。31日をゲットするのにも「一生に一度だから！」と数年かけて家族を説得しなくてはならなかった。だから彼らと私の体験や感じ方は決して同じにはならない。

それから私の荷物の作り方が四十年前自分が山に登っていたころのやり方を基準にしていたのがマズかったかもしれない。でもそれは仕方のないことだ。自分の体力がどの程度落ちているかは日常ポスティングなどで歩き回っていてもやはりはっきり認識することはできない。20km前後の荷物を担いで長時間歩いてみるなんてことは普段できない。人目があるし時間はないし。それに前回の記録でも述べたが日本の深山幽谷に分け入るとヨーロッパの里山歩きをするのでは荷物の正しい作り方というものがちがってくるのだということに気付かなかつたのだ。



二年前、2016年の誤算

具体的に言って私の荷物の何が悪かつたか、何が余分で重くなつてしまつたのか？ということだがまず木綿の衣類を持って行つたのはまずかつた。が、勿論薄手の着古したものば

かりである。日本人はどうも自然素材というものが好きなのだ。身体に良いと思っているところがある。しかし木綿は実は重いし濡れると乾きにくい。それでどうしても予備にもう一枚、とかいうことになってしまう。それで今回の衣類は全部ペラペラの化繊にした。トップもボトムも下着も靴下も、そのペラペラのを三枚ずつとした。着ているものまでも含めてである。他に小さいダウンベストと薄い化繊のパーカーとビニールのレインコート（ジュニア用）の上下。タオルはフェイスタオルを二枚、ハンカチ三枚、以上である。そしてシュラフは薄いシュラフカバーで代用することにした。それから薬を大量に減らした。特に湿布薬。ケガさえしなければほとんど必要ないことがわかった。カットバンだって2、3枚しか使わなかったのである。

それからガイドブックなどの資料を削減した。どれが絶対必要でどれがそうでないか前回の体験でわかったから。

食料は基本的に現地調達になるのもともとそんなに持参していなかったがその中からも「これは持って行っても食べたくない」というものがわかったのでいくつか削った。

ケータイのホルダーも贅沢品とわかって外す。電池式充電器用の電池の予備も減らす。今回は日数が少ないことであるし。それからキャラバンシューズを脱いだ時に履くものとしてスニーカーではなく軽いサンダルを持参。素材としてはウレタンは軽いが嵩張る、ゴムサンダルはぺたんこだが重い、というジレンマの末に軽いウレタンの方を選び、荷物の中に押し込むのに少々苦勞した。そしてザックはそれなりの重さはあるても小さめで高機能のものを選んだ。

それからカメラ。これはいつもと同様インスタントカメラの39枚撮りを三台である。日数が五日以上ならばいつもそうすると決めている。そりゃあ、できれば沢山撮れるほうがいい。だから一般的にはデジカメかスマホ、こだわる方で重さを気にしない方は高機能の良いカメラを持っていくのだろう。しかし私は重量的にこれが限度だし、デジカメやケータイ、スマホのカメラは使いにくくて苦手だ。それにインスタントカメラは盗まれる心配がまずない。日本以外では使えないだろうし他人の半分使ったフィルムを盗んで何になるのか？万が一落したり忘れてきたりした場合でも損失は少なくてすむ。

このようにして私は前回は15kgほどあった荷物を5kgほどに削減し、満を持して出発の日を迎えた。前回カミーノに行ったのは2016年だが次の年はブータンに出かけたので二度目のカミーノは2018年である。私は大きな旅行は一年に一回が精いっぱいである。本当は私にずーっと家にいてほしいと望む家族がぶら下がっているのでやはりどうしても「行かせていただいている」感がぬぐえない。旅費は自分で稼ぎ、日本にいる間はできるだけ家族に奉仕し、国内旅行はおろかちょっと一人で数時間の外出というのもできるだけ控えてそれでもやっぱり「毎年海外に行くんだなあ・・・」と思われている状態。私にしてみれば「一年にたった一回だけじゃないか。」という感じなのだが。そして前回のカミーノから二年もたってしまうと私は自分の体力が少しずつ衰えてきているのを感じないわけにはいかなかった。

その変化とは・・・、例えば布団を二段ベッドの上段に上げるのが難しくなり、5 kgの米袋や3 kgのドリンク類が重いと感じるようになった。それから義母の要介護度が進み、全く自力で身動きすることさえできなくなってしまったので介護の負担が大きくなり私は腕に変な痛みが出てきて治らなくなった。筋肉痛でも関節痛でもない。神経系の問題のようである。そして日常生活の中でも疲れることが多くなり、何度も横になって休まなければならなくなった。

しかし私は上半身は弱いが下半身はそれほどでもないと思う。ポスティングなどでたくさん歩くと確かに全身で疲れはするが休めばすぐに回復する。足だけが痛くなるということはあまりない。あるとすれば靴擦れとか履物の選択の問題に起因する時だけである。だから今頑張らなくてはならない。周囲に遠慮している場合ではない。まだ足も手も動くうちにやらないと年が経つごとにますます実行が困難になることだろう。介護中の義母は前回はたまたま入院していたが今回はショートステイに預けた。(と一言で言うと簡単そうに思えるがそのための手続きや手間はなかなかの大仕事であった。)そして他には何の障壁に妨害されることもなく私は無事に出発の日を迎えることとなった。

2018年4月27日(金)～4月28日(土)

羽田を22:55のフライトなので午後五時に家を出る。成田は遠くてお金も時間もかかるので私は出来るだけ羽田を利用することにしている。羽田に向かうのに今までは大概大宮から京浜東北線を利用していましたが今回は湘南新宿ラインを利用した。というのは出発前の夕食に天井が食べたくなったからである。「天井てんや」の店をネットで探すと大崎にあった。大崎駅付近は詳しくなかったが、ほとんど初めて行ったのに勘ですぐに見つかった。天井500円。(割引券があったが家に忘れてきてしまった。)しかし店舗が小さく、混んでいて相席を余儀なくされてしまった。でもまあよい。

そのあと浜松町に行き、東京モノレールに乗る。品川から京急電鉄に乗ることもできるが私はモノレールが好きなのだ。

19:40ごろ空港に着く。そして20:20ごろにカウンターチェックが終了。私の少し前に並んでいたフランス人らしいおじさん(といっても私より年下かもしれない。)が、私が二年前にサンティアゴ・デ・コンポステーラの土産物店で買った手提げバッグを見て、「巡礼に行くの?」と目とジェスチャーで尋ねた。私はニカッと笑って「そうです。」と目で答えた。

機内での座席はまたまた二本の通路に挟まれたエリアのど真ん中! どうやったら希望の席が選べるのだろうか? 早期にネットで? お金の力で? ととにかく必要なことはすんだのでそのあと両替を済ませ家にメール。21:00過ぎに荷物検査、搭乗手続きなど。

機内の十二時間は省略する・・・あ、少しだけ書いておくと周囲は外国人の大柄な男性ばかりだった。隣のオジサンの肘が私のテリトリーにまで侵入してくるので閉口した。

十二時間のフライトは長い。長くて長くて長くて・・・とっても長い。しかしそれでも三十分・・・一時間・・・と残り時間は少しずつ減ってゆき、そのうち飛行機は無事にパリのシャルルドゴール（以下 CDD と略記）空港に到着した。飛行中は自分の座席の前のディスプレイでほとんどフライト情報だけを眺めていた。そして眠れる時には眠った。

CDD 空港というのはなぜかいつ来てもとてもわかりにくい。「〇〇はこちら」という矢印表示があってその通りに進んでいくのだが行き止まりになってしまうとか、途中で「〇〇はこちら」の矢印が違う方向に向かっているのを発見するとか「〇〇はこちら、××もこちら、しかし〇〇のうちの△△はこちら」という表示が現れたり、という感じなのである。私はターミナル E に到着し、三時間後の乗り換えのためにターミナル G まで行きたかったのだが手当たり次第に十人近くの人々に尋ねてまわり、しかしそれぞれのいうことは微妙に違っていた。

表示を指して「あっちですよ」と言う人もいれば「バスに乗るんです」と言う人もいた。「この上の階から行けます」と言う人もいた。おそらくそのどれも違っていたのだろう。ただ私の英語やフランス語の能力が不十分で彼らの言うことの一部ずつしか理解できなかったのでもうなってしまったのだろう。それと私は「バスに乗る？めんどくさい。歩いて行ける距離じゃないの？」という思いがあった。だから極力バスを避けてウロウロしていた。しかし偶然同じようにウロウロしていた一人旅の日本人女性に出会ったために迷走は終了した。彼女はターミナル G 行きのバス乗り場あたりにいて「待っているんだけどさっぱりバスが来ない」と言っていた。私はやっぱりバスなのか、と納得し、一緒に行かせてもらうことにした。そして少したって、ターミナル G 行きのバスが少し離れたところに停まっているのを見つけ、無事に乗り込んだというわけである。

その女性は私より少し若いようだが子育てはもう終了した様子でかなり気ままに各国を旅して歩いているようだった。そして彼女もその時ターミナル G に向かっていたのだが目的地は私とは異なりドイツのミュンヘンだということで、出発時刻も私より一時間後だということであった。しかし搭乗ゲートが同じだったので、私は搭乗までの時間をロビーで彼女と一緒に過ごした。

ところで羽田や成田と違って、フランスやスペインでは搭乗口近くに近々のフライト時刻の表示がなかなか出ない、ようである。だから「本当にここでいいのか？」としばらくの間不安である。ブログなどを見てもそういう不安を経験したという日本人の方はいるようである。外国から日本を訪れた旅行者はしばしば日本の駅とか交通機関の案内表記はわかりにくいと言うようだが、それは漢字だらけの世界の中に放り込まれて頭がパニックになっているか、日本の交通機関の路線の数がとてつもなく多くて複雑に見えてそういうのに慣れていないからではないかと思う。文字の点では英語ができればかなり理解できるはず

だしハンゲルや中国語だって出ている。矢印などで誘導する表記について言えば日本の物はかなりわかりやすいのではないかな？

それから CDG とかタイ、バンコクのスワンナプームとか、大きなハブ空港はわかりにくくなりがちなのだろう。スペインのマドリードのバラハス空港とかオーストリア、ウィーンウィーンの空港、フランス、ボルドーのメリニャック空港はそんなにわかりにくくはなかった。鉄道の駅でも二、三人の人に尋ねればすぐに目的の場所がわかった。しかし列車の発着の番線は二十分ぐらい前にならないと表示されないのが不安になったことはよくある。

さてドサクサの果てにやっと国内線のビアリッツ行きの飛行機に乗り込む。7:55発、9:20着。約一時間半のフライトである。私はこういうローカル線とかあるいはブータン航空とかの小型の飛行機が好きだ。エコノミー席なので座席自体が広いわけではないのだが、機体が小さく座席数が少ないので新幹線に乗っているのとそう変わらない感じで圧迫感がない。羽田（成田）～バンコク間もパリ間もジャンボ機なので横に12席、縦に40～50席？みたいなとんでもない作りである。しかし小ぶりの飛行機だと通路は真ん中に一本あるだけでその左右に3席ずつならかなりゆったり感があるし、今日乗ったビアリッツ行きは通路を挟んで片側は3席だがもう片側は2席しかない。私の席は2席のほうの通路側だったのでとても嬉しかった。

8:30ごろコーヒーとアプリコットケーキが出た。こういう短時間のフライトで、ティータイムに何が出るのかと考えるのも楽しいことである。夜中の三時に巨大なオムレツが出たり（夜行便でタイに飛ぶと朝四時過ぎに到着するのでその前に朝食が出る。それでそういうことになる。）みたいなことは絶対にないから。クラッカーだったりケーキだったりナッツだったり……。どれもおいしい。





ビアリッツ空港

さてビアリッツ空港に到着。こういう小さい空港も私は好きだ。しかしビアリッツの鉄道駅に行くためにバスに乗ろうと思えばバス停を探すがわからない。5～6人に尋ねてみたがあっちで聞けこっちで聞けとたらいまわしにされたり、さあわかりませんと言われたりでさっぱり埒があかない。そういえば四年前にボルドー駅で空港に向かうバスの乗り場がなかなかわからなかった。5～6人に尋ねながらあちこち駆けずり回りやっと乗り場にたどり着いたものの今度は待てども待てどもバスが来なかったので諦めてタクシーに乗った。70€ほどかかった。その時運転手さんにチップを渡すのを忘れてがっかりさせてしまった。

今回も仕方なくタクシーに乗った。多分歩いても行けるであろう距離であったが道がわからなかった。地図とかは持っていなかったから。(あ、スマホがあるといいのかな?) 料金は11.5€だったが今度はチップ込みで12€を渡してスマートに降りることができた。



ビアリッツの鉄道駅

ビアリッツ駅に着いたのは十時少し前であった。とても可愛い建物だった。ヨーロッパにはこういう可愛いデザインの駅が多い。しかし行ってみると駅の扉が閉まっていた鍵がかかっていた。えっ、なぜ?と思った。冗談じゃない、三時間あまり後だがここから

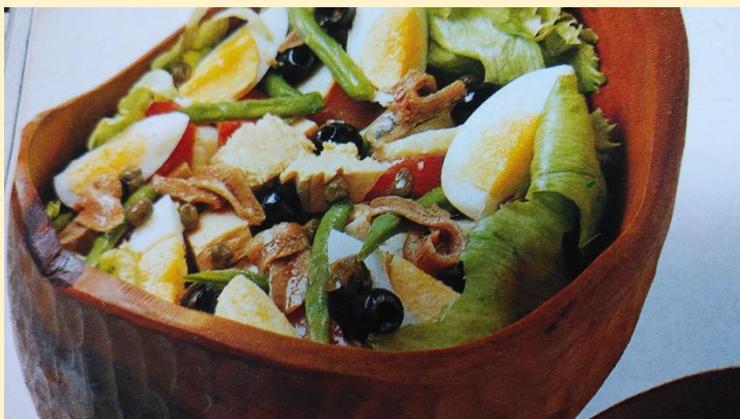
乗車するチケットを持っているのである。まわりにいる人に尋ねてみてもわからない。途方に暮れたがその直後にシャッターが上がり、ホッとする。

駅の中のキオスクのような所でポテトチップスとオレンジの缶ジュースを買う。3€。それと手持ちの食糧で早めの昼食とする。

10:40、ちょっと寒いのでダウンベストを出して着る。11:00ごろちょっと外を歩いてみる。魅力的なお店もあったがここで買い物をして荷物を増やすわけにはいかないのですぐまた駅に戻る。

11:50、そんなに退屈ってわけでもないんだけど・・・ああ、もう二年もたったのか。前に来た時もよくこうして駅のベンチに座って時間をすごしていたなあ・・・と考える。

12:30、キャンデイもあったほうがいいのかと思い再びキオスクに行った見たらサラダニソワーズ（ニース風サラダ）の缶詰のようなものを見つけて買ってしまった。4.9€だった。それとキャンデイとクラッカーもあわせると9.6€。こちらでは日本に比べてこういうものの値段が高めだなと思う。いや、「高め」というより二倍くらいの感じがする。飲食店で食事をするような場合が日本の1.2倍から1.5倍くらいの感じだが分量を考えるとトントンかもしれない。だからたくさん食べられる人はレストランやカフェで食べたほうが良い。



サラダニソワーズ（出典・集英社「セゾン・ド・ノンノ」昭和49年10月号）

しかし私のように年をとって胃袋が縮んでしまったような人は食べ残して捨てて次に新たに別のところで出費をすると大変もったいないのでタッパーや袋などを携帯し、機内食や外食で食べきれなかった分はしっかりテイクアウトして二、三食分として食べるつもりで行く必要がある。（もちろん同行者がいてその人が健啖家であるならば食べきれない分はその人が引き受けてくれるであろうからその必要はない。）それに日本と違っていつでもどこでも好みの食物が手に入るわけでもない。みっともないだのビンボー臭いだのと言っている場合ではないのである。

それにしてもやっと昼過ぎである。しかし私は先刻からずっと午前中のような気がしなかった。時差のせいかもしれない。朝の七時ごろからもう午後のような気がしていた。確か

にこちらの朝七時は日本だと午後の二時か三時である。



ビアリッツ駅のプラットフォーム



ビアリッツ出発直後の車窓の風景

13:52、電車はビアリッツを出発し、14:08にバイヨンヌに着いた。バイヨンヌからサン・ジャン・ピエ・ド・ポー（以下 SJPP と略記する）までは鉄道もあるのだがその日によって（多分客の多い、少ないによって）バスになることもある。その日はバスだった。バスに乗る前に駅でトイレを探す・・・あれ？この辺にあったはずだがと思うが見つからない。駅員さんに尋ねると「今は閉鎖されています。カフェで借りてください。」だそう。えーっ？発車まで40分あるとあったって、わざわざお茶をしに行けるか？お腹もすいていないしお金ももったいないし、それとも何も注文せずにトイレだけ借りる？私はそこまですで面の皮が厚くはないのだ。それでしかたがないのでトイレは SJPP に着くまで我慢することにした。多分大丈夫だという気がした。



バイヨンヌ駅前。取り壊し工事中の建物がある。

ところで私は何となく感じていたのだが、「フランスの匂い」というのがあるような気がする。何々の匂い、というふうに言葉で説明できないのだが、何だか以前にも感じたことのある懐かしい匂いがするような気がしていた。

14:52発のSJPP行きのバスは、15:50に終点に着くはずだったが少し遅れて16:13に着いた。後から考えたがビアリッツ空港からバイヨンヌ駅までタクシーに乗ってもよかったのである。多分30€程度の料金ですんだであろう。どのくらいの距離があるかわからなかったのでビアリッツ~バイヨンヌ間も鉄道を予約してしまった。そして長い待ち時間を過ごしてしまった。バイヨンヌからSJPPへ向かう列車は後で調べてみると午前10時台ぐらいにもう一本あるはずだ。それに乗れるようにすればよかった。旅行会社の方がちょっとアドバイスをして下さればよかったのに、と思う。この時私を担当した方はどうやら入社一~二年目くらいの新人という印象だったからそこまで気が回らなかったのかもしれない。

バスに乗っている途中で気分が悪くなってくるが上を向いて頑張る。天気は初めは良かったのだが途中から雨が降ってくる。そしてそれが次第に土砂降りとなる。気が滅入って来るが幸いSJPPに着くころには止んでくれた。



サンジャン・PPの駅前

トイレはあるだろうか？二年前に電車で行った時にはあったのだが四年前にバスで行った時にはなかったのである。駅員は駐在していたのに。閉鎖されていたのだろうか？

さてそのトイレ、今回は以前の記憶とは違う場所にそれらしきものがあつたので行ってみると閉鎖されていた。諦めて町の公衆トイレに向かおうとすると一人のおばあさんが、鍵を駅員から借りてくれば良いという。そして別のおばさんが駅員に申し出て鍵をゲット！そしてもちろん言い出しっぺのおばあさんと実働者のおばさんが優先で、私は三番目に利用した。そして私の後からもう一人来たので鍵を返す役目はその方をお願いした。



この先に巡礼事務所がある。右は巡礼用品店。

SJPPの町に来たのは三度目になる。馴染んだせいかわ巡礼事務所が思ったより近くに感じた。そして事務所の係員のおじさんはとても親切であった。いつも感じるのだが「日本人」というとこちらではおおむね好意的に接してもらえる。日本や日本人についての情報はこのごろ世界中に良く流されていて興味深く思われているのと、実際に出ていく日本人がそれほど多くなくて珍しいせいであろう。日本人も海外にはとても興味があるのだが長い旅をする時間がないのだ。

欧米人が「日本へは行ってみたい。でも・・・」とためらう理由は大抵遠くて渡航費がかかるということらしいが日本人にとってのそれはまぎれもなく「そんな時間はとれない」というものである。ヨーロッパに観光旅行に行くとなると最低一週間は必要である。勤め人も自営業者も普通そんなに長い(?)休みは取れない。なぜなら業務に支障が出る、または周

困が許さない。学生は時間があってもお金がない場合がある。家庭の主婦などは家族の世話から離れるべからずみたいな不文律にからめとられて動きがとりにくい。欧米人たちはもっと自由に動いているように見えるのになぜ日本人はそうなるのかわからないがとにかく時間に不自由なのだ。日本人にとって、自由な長い旅というものは費用がかかるかからないうる関わらずとても贅沢なものなのだ。

話を戻す。その巡礼事務所にはアルベルゲが併設されているということであったが満員になってしまったということで、おじさんは私に別のところを教えてくれた。しかし行ってみたらそこもまた満員で私は事務所に戻らされた。しかしその人がさっきのおじさんに電話をかけて事情説明までしてくれた。事務所に戻ってきた私にさっきの親切なおじさんは受付の仕事を差し置いて建物の外にまで出てきてもっといろいろ探してくれたのだがなかなかうまくいかない。申し訳ないので「自分で探すから」と言っておじさんには仕事に戻っていただく。しかし時間はますます経過して条件が悪くなり雨も降ってくる。早くどこか見つけないと大変だ。良さそうな所があったかと思えばそこは予約なしではダメだとか言われる。



86€のホテルの部屋



外観はこんな感じ

すぐ目に付くところに小さいホテルがあり初めに行ってみた時86€だと言われて退散したのだが、この際あまり遠くまで歩き回るのも嫌なので結局そこに停まることにする。今回だけだ。次から節約すればいいのだ。それに歩き始める前の晩は大切だ。夜行便や電車やバスを乗り継いでやっと着いたところなのだ。その疲れを残しておくわけにはいかない。

ホテルに入り、ようやくプライベート空間に収まる。荷物の整理をし、バスタブに湯を溜めて入浴する。靴下とパンツだけを洗って備え付けのバスタオルを使ってドライ。ホテルでしかできないことだ。

夕食は当然持ち込みである。ビアリッツの駅で買ったサラダニソワーズと家から持ってきたアルファ米のドライカレー。水道から出る水を出来るだけ熱くして調理する。そして出来具合は「まあこんなもんだろう」という味だったが一食分の分量なのに一度に食べきれないことに驚いた。随分私の胃は縮んでしまったものである。

七時ごろ外に出てシタデールの写真を撮る。シタデールというのは昔の城跡のようだが詳しいことはわからない。私はいつも歩けるかどうかだけが主要な関心事になっていて、名所や史跡の見学などについては二の次、三の次になっている。興味がないというわけではな

いのだが時間的な余裕がないのだ。もともと自分のキャパシティーの二、三割増しの歩行計画を引っ提げてやってきているものだから。でもさっきアルベルグを探している時他の人たちがシタデルを見物しながら写真を撮っているのを見て、こんなに近いところにあるなら私も写真くらい撮っておこうかなと考えた。でもしっかり中に入って見学するのが面倒くさくてさっと写真を撮るだけにしてしまった。



シタデル

それから巡礼用品店に入ってみた。そして一般的なものよりも小さい可愛いコキークがあったので買った。ホタテ貝の貝殻に紐をつけたものである。2. 5€。一般的な大きさのものの方は2€だった。そしてまたホテルの部屋に戻ってドライカレーの残りを少し食べた。でもまだ残っている。八時ごろ寝る。

4月29日（土）

その前にも一度トイレに起きたのだが一時ごろ目が覚める。もう十分に眠り足りた感じがする。私はいつも連続五時間以上眠ることは稀なのだ。そしてしばらくベッドの中にいたが、二時ごろ起きて行動着に着替える。それにしてもホテルのベッドに寝られたからよかったんだが持参の衣類はちょっとミニマムすぎたかな？でもこれ以上増やすとやっぱり困るのだ、嵩張りすぎて。

昨日の夕食の残りを食べる。でもなぜか夕べから洗面所のお湯が出ない。風呂で使ったからかなあ。それでインスタントコーヒーなどが飲めない。それで水にスティックシュガー（機内食の）を溶かしてドリンクとする。インスタントの粉物が水に溶けなくてもグラニュー糖なら何とか溶けてくれる。水だけ飲むよりはかなりマシな食事になる。でもこの程度の不便はよくあること。今のところわりと順調に進行しているではないか。目標の「よく眠り、よく休み、よく考え、思い切り楽しく、あるいは辛すぎない程度に頑張っって良く歩き良い思い出を残す旅」は。

残してあった機内食の小さいフランスパンが堅くなっている。サラダニソワーズの中に最後に残ったツナの塊を挟み込みたいが……。そこで機内食のプラスチックナイフ登場！

捨てずに持ってきてよかった。役に立った。

6:20 出発。今まで、七時になるまでは暗くて歩けないと思っていたが街中で街灯もあるので歩くのにほぼ問題はなかった。しかし道はこんなに急だったのだろうか？ 驚きの連続である。二年前は荷物が重すぎて辛いということで頭が一杯で、道が急であることに対する印象は薄れてしまっていたらしい。

9:10、8km地点のオリソンに到着。カフェオレ2€を頼み、休憩する。そして9:30、また歩き出す。



オリソンのカフェオレ



オリソンのカウンター

車も通れる広い美しい道だがなかなか傾斜がきつい。人が写した写真や動画で見ると実際より緩やかに見えるものなんだな。私は二年前に実際に来てみるまで「こんなの、山じゃない。」と思っていた。日本の急峻な山々に比べたらなんとなだらかで楽なことか……。二年前に重い荷物で苦しんだ後さえそう思っていた。



荷物が重いのが悪かったのだ。こんなになだらかで美しい道なのにこの荷物のせいで楽しめず、ただただ辛いだけの旅になってしまったと思い悔しかった。しかし荷物を5kg程度にしてみてもようやくわかった。この道の勾配が確かに「ここが一番の難所のピレネー越え」と言われるだけのものであったことが。



それでも荷物が15kgあった時に比べると5kgだけで歩いているのはかなり楽なのだ。けっこうしんどいとは思いながら私はちゃんと楽しんでいる。広々とした草原の中を行く道、遠近の山々、放牧されている馬たち、いろいろに移り変わる地形、不思議な形をした石たちが転がっている・・・など、私はちゃんと認識し、感動しながら歩いていた。途中、断崖の上に立つ有名なマリア像がある。何であそこに人が集まっているの？もしかしてあれ？・・・と近づくとマリア像が見えた。ここにあったのか！前回は余裕がなさ過ぎて気づかずに行きすぎてしまったのだった。





しかしそれでも何から何まで正確に確認できたわけではない。1470mの最高点レポエデール峠は十二時頃越えたのだろうか？気を付けながら歩いていたのだがよくわからなかった。そしてイエバニタ峠らしきところが13:40、そのあと美しい林の中に入り、あともう少しだなと思ったら「ロンセスバージェスまであと6km」と書いてある。ああ・・・



ロンセスバージェスまであと6km

15:30、夫からメールが来る。待つてよ、もうすぐ着くはずなんだから・・・。

16:30、ロンセスバージェスの宿泊施設に到着。S J P Pから25kmだか27kmだか（本や標識によって書いてあることが違う）を十時間ちょっとかかったということだな。こんなもんかな。足にも結構キツイ道だった。前回のように上半身への負担が大きくない分足がしっかり荷重を負担してくれていたのだ。

宿泊の受付は当然もう始まっていた。以前より宿泊客が随分多くなっているように見受けられる。120人収容と聞いていたがそんなものではないように見える。ベッド数も増えたのか？受付の長い長い行列に並ぶ。前回ほどバテてはいなかったが一時間近く並ばなくてはならなかったのがとても辛かった。

しかもやっとチェックが済んだと思ったら、以前に泊った建物とはだいぶ離れた別の棟に誘導された。ベッドは二段のようだったので受付の女性に「上段か、下段か？」と尋ねてみたらパソコンで調べてくれて「下段だ」と言ったのでヤレヤレと思った。とても上段によ

じ登れるような状態ではない。

ところで大抵のアルベルゲでは履いてきた靴は建物に入ったら脱いで指定された場所に置くことになっている。カミーノの靴はだいたい泥まみれになっているからである。そして室内やちょっとした外出には各自で持参した楽なものを履く。サンダル、草履、あるいは軽い靴でもかまわない。

私は脱いだキャラバンシューズを受付近くの靴置き場に置いたままサンダル履きで自分の宿泊棟に行った。すると案内してくれたおじさん（ボランティアのオスピタレイロとしてオランダから来ている人たちの一人らしい。）が、靴は自分が泊る建物の靴置き場に置くようにという。でも後で持ってくればいいと言ってくれたのでそうすることにして私はまずやっとゲットした自分のベッドに収まってシュラフカバーを引っ張り出してその中に潜り込み二時間くらい寝た。そして少し動けるようになってからトイレに行ったり靴下を洗ったりした。

前回と同様に食事は頼まなかった。手持ちの食糧（大した量ではないのだが）を少し減らしたかったから。ここはシャワーもちゃんとしたのがあり洗濯機もあるようだったがそんなのはどうでもよかった。シャワーも洗濯も今日はパスである。順番待ちをしたり周囲に気を使ったりするのはしんどい。それにキャラバンシューズを取りに行かなくてはならない。仕事はそれだけで沢山だ。しかしそれで外に出て私は道に迷った。とても広い敷地の中に多くの建物がある。行き会う人々に尋ねながらやっと私は目的を果たして部屋に戻ってきた。

そして前日のドライカレーと同じシリーズのマカロニの製品を熱湯で調理して食べようとした。しかしその棟のその階にはテーブルと椅子を並べた談話室はあったが調理設備はなく、私はまたも洗面所の熱湯を用いることとなった。しかしそれもやはり50℃程度にし過ぎなくて調理用としては低温すぎた。それでまた私は不出来な食事で我慢せざるをえなくなった。この食品は水でも一時間程度の時間をかければ調理できることになっているがやはり冷たい状態で食べるよりも熱々に出来上がってそれが少し冷めた状態で食べる方がはるかに美味しい。しかし贅沢を言うことはできない。カミーノにはこうした不便はつきものである。

【 中の部に続く 】